

樽のレコード原盤の秘密

The Whispering Master
1949
by Frank Gruber

主要登場人物

- ジョニー・フレッチャー……………ボディビル本の街頭売りテキ屋。頭が切れる口達者
サム・クラッグ……………ジョニーの弟分で本のモデル。頭は弱いが腕力は強いタフガイ
ジェファースン・トッド……………自称「世界一の名探偵」。ジョニーらのライヴァル
レスター・ピーボディ……………「四十五丁目ホテル」のフロント・マネジャー
エディ・ミラー……………同ホテルのボーイ長
マージヨリー・フェア……………歌手志望のアイオワ娘
スーザン・フェア……………マージヨリーの妹
ダグラス・エスベンシエイド……………大金持ちでマージヨリーの婚約者
オーヴィル・シーブライト……………マリオタ・レコード社の社長
チャールズ・アームストロング……………同社の副社長
ウォルター・ドニガー……………同社の営業部長
エドワード・ファーマン……………同社の経理部長
ジョセフ・ドーカス……………同社の工場長
ヴァイオレット・ロジャース……………同社の電話交換嬢

第一章

その女性は二十四歳、亭主など捨てて憚らない映画女優ほどの美貌の持ち主だった。すばらしい天然の金髪、輪郭のはつきりした、みずみずしい顔立ちは、こうした容貌と縁のない女性には嫉妬を買いそうなタイプだ。

ところが彼女はスカンピンだった。

財布には三セントきっかりしかなく、ホテル・マネジャー、ピーボデイからの三度目で、おそらく最後となるはずの請求書を見つめていた。昼の十二時までには、三十三ドル七十八セントの延滞宿泊料を支払わなければ部屋を引き払うようにと、ピーボデイは通告してきた。

いくら（四十五丁目ホテル）とはいえ、マジヨリー・フェアほどの美貌に恵まれた女性なら、何とかなりそうなわずかな金額だ。とはいえ……つまり、その美貌が仇となって三セントしか手元に残っていないかった。

彼女はピーボデイのメモを、起きぬけの乱雑なベッドに投げ捨て窓辺に出た。外の景色は心楽しいものではなかった。八フィートもある換気筒が日光をさえぎり、周辺の部屋には湿っぽい空気しか送りこんでこない。

彼女はしばらく真向かいの窓に眼をやっていた。その部屋の相客のひとり、先週も彼女に向かっ

てにやにやと何度も笑いかけてきた——エレベーターやロビーで顔を合わせる度ごとに。あの男からなら三十三ドルくらい巻き上げるのはお茶の子さいさいだろう。その相棒は大柄な体格の男で、さしずめレスラーかボクサー、この種の男なら金を持っていくに違いない。

彼女がそう考えているとき、ちょうど換気筒ごしの窓辺に、あの大男が姿を見せた。男はパンツこそ履いていたが……ほかには何も身に付けていなかった。マージヨリーは慌てて身体を引っこめる。彼女はバスルームに入ると、長いあいだ葉箱を見つめていた。思い切つて蓋を開ける。歯みがき、歯ブラシ、うがい薬、オーデコロン、マニキュア液、マーキユロクロム（赤チン）の瓶。

ヨードチンキも、睡眠薬の錠剤もなかった。そしてわずか三セント。自殺したくなるほどの貧しさだった。

彼女はバスルームを出た。やはりそこには窓がある。しばらくじつと見つめていた。自殺する気にはなれなかったが、ほかに方法もない。いずれそう決心することになるかもしれないが、肚を決める前に運命が邪魔をしていた。

マージヨリー・フェアの部屋はノックされた。

部屋代催促のホテル・マネジャーだと、彼女は思った。請求書突き付けてわたしを死に追いやろうとしているのに、それでも飽き足らないのかしら？

彼女は戸口に行きドアを開けた。

マネジャーではなかった。だがマージヨリーと面識のある男だった。この男はもしかして……。

男は笑いかけてきた。「入ってもいいかね？」

「どうぞ」

男は部屋に入りドアを閉めると、それを背にして立ちはだかった。「こんな朝早くから立ち寄ってすまないな」

「構いませんわ」

「きみにどうしても逢いたかった」部屋の中に目を配りながら話を続ける。「それはきみが受けたオーディションのことだが」

「駄目でした」マージョリーは言った。「声が悪くて……」

「いや、そうじゃない。もうすこしトレーニングすれば大丈夫だ」

「トレーニングは積んできました。もうすでに一万ドルに値するくらいのレッスンをしてきました」男の眼は部屋の内部を探るのをやめ、じっと彼女に注がれた。

「きみの美貌なら歌わなくてもいいよ」

「わかってます。そのせりふを聞くのはニューヨークで二十八人目ですわ」

「それで？」

「そう言ってくれた人はアイオワにもいます。百万長者です……それでもわたしはニューヨークに出てきたんです」

「そうか」ドアを背に男は言った。「わたしは百万長者じゃないが、一、二年のうちにはそうなるよ。それでここに来たんだ……」

彼は口元にゆがんだ笑みを浮かばせ、上着のポケットからびっちりした手袋を取り出すと手にはめはじめた。マージョリーは話が呑みこめず、彼を見つめていた。

「レコード原盤だ。きみの持っているやつ、それが欲しいんだ」

マージョリーの眼は驚きで大きく見開いた「あのコン・カースンがレコーディングしたものを？」
「そうだ」

「でも、あれはあなたのものではないでしょう」
「おれのものになるのさ」

男は背後に手を伸ばしドアの掛け金をかける。マージョリーはその意図に気づきあとずさりしはじめた。

「ドアを開けて！」

男はじりじりと迫ってくる。マージョリーは思わず口を開けた。本能的に悲鳴を挙げようとしたが……脳裏にホテル・マネジャーの最後通告が浮かぶ。ホテル料金不払いで立ち退き要求されている娘が、助けを求める悲鳴を挙げたところで何になるだろう。自分みたいな立場の人間だったらホテルで騒ぎを起こすだろうか？

悲鳴は喉元で止まってしまった。彼女は男の迫る手をわきによける。なおも迫りつつあるとき、男の眼がタンスの上の新聞紙から半分覗いている金属製のディスクを捉えた。

マージョリーはその視線の先へと突進し、男を突き飛ばしディスクに向かった。彼女がディスクを手にしたとたん、手袋をした拳がその顔に炸裂し、彼女を窓の敷居まですっ飛ばした。男は彼女に飛びかかってきたが——マージョリーの手は開いた窓の外に伸びた。

ディスクは滑らかに換気筒を横切り、向かい側の部屋の開いた窓の中へと消えて行った。

男の咽喉から押し殺した怒りの叫びがもれる。彼は手袋をはめた手でマージョリーの喉首をきつく締めつけてきた。

五分前には自殺の直前にあつた娘も生きるために必死で争つた。しかしその手は容赦なく彼女の氣管を圧迫した。一、二分後、男はマージョリー・フェアを引きずりバスルームに放りこんだ。

彼はマージョリーをそこに放置したままバスルームのドアを閉めた。

部屋のドアを拳で叩く音がする。男は罨にかかった虎のように足が凍りつく。

「マージョリー」女性の声が出た。「わたしよ——スーザン！」

悪運強く彼はドアに掛け金をかけていた。ドアノブがガチャガチャと音を立てる。それからまた拳でドアを叩いていたが、まもなく静かになつた。

男はドアまで行くと聞き耳を立てた。何も聞こえなかつたので、はじめてほっとしたため息をつく。男はそつと掛け金を外すと、ドアを開け出て行つた。